

負けるな!

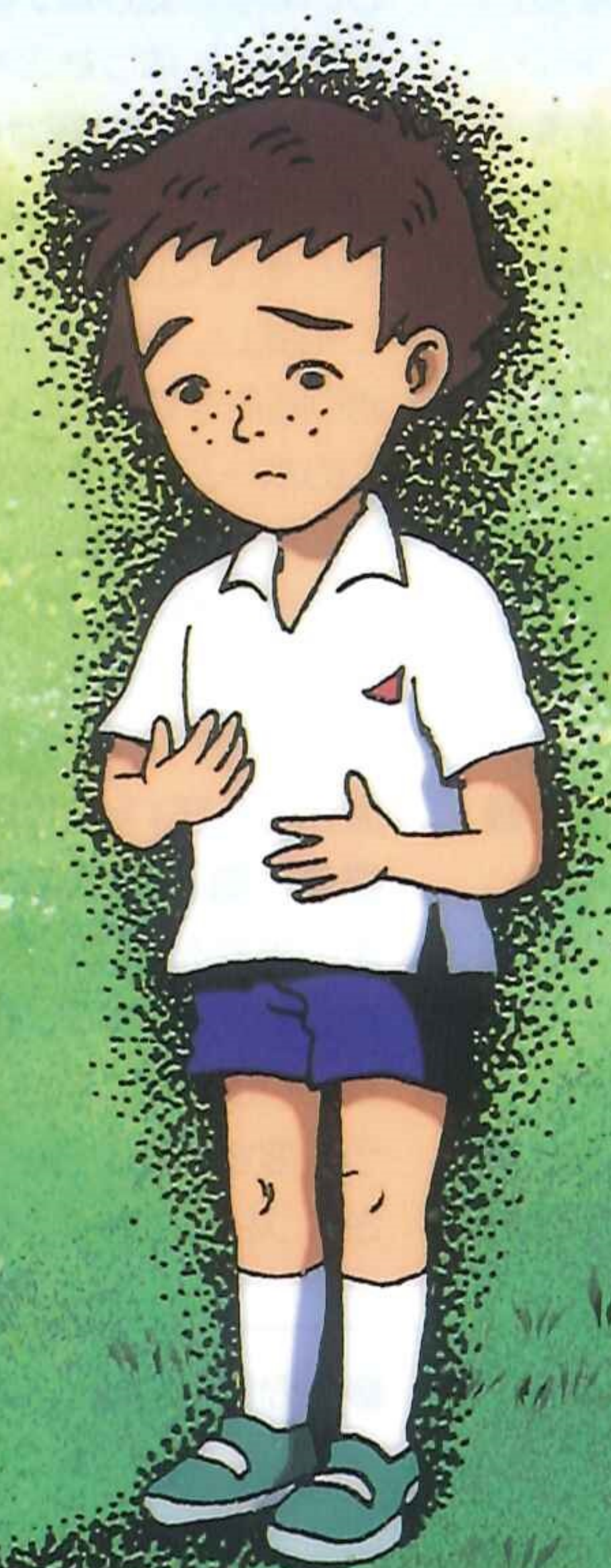
千太

—さよならいじめ虫—

誰の心の中にもいじめ虫がいる。

ドビュッシー「亜麻色の髪の乙女」の調べにのせて、

素直な心でいじめを考える、ある夏の物語。



アニメーション映画

—さようならいじめ虫—

負けるな！ 千太

誰の心の中にも、いじめ虫がいる。

人間も他の生き物と同じように、残酷な心、攻撃する心を持っています。誰の心の中にもいじめ虫がいるのです。今、ひとりひとりが自分のいじめ虫と向き合い、どう付き合っていくかが問われています。この物語は、弱いものへの慈しみや命の尊さを基本に、誰の心にもいじめ虫がいること、いじめという行為がいかに醜く、無益であるかを、アニメーションの特性をフルに活用し描いていきます。この物語をどう捉えるかはまったくの自由です。百人の子供達が観れば、百通りの捉え方があるでしょう。様々な意見、反発、自分自身との葛藤があるはずです。また、心の壁から這い出してくる、それまで気づかなかった気持ちや本音に驚くかもしれません。この素材がいじめという難しい問題について皆で語り合う、ひとつのきっかけとなってくれることを願ってやみません。

命とは？人間とは？いじめとは？この映画は、ひとりひとりの心に直接この問いかけを試みる、ある夏の物語です。

❖ あらすじ ❖

物語は、**蝶子**という少女を通して語られてゆきます。ある日、同じクラスの身体の弱い女の子が、いじめグループのターゲットになります。クラスメートは、離し立てるグループ、無視を決め込むグループに分かれ女の子は孤立します。しばらくして、同じクラスの昆虫好きの少年**千太**がこのいじめを先生に告げ口したという噂が広がり、矛先は**千太**へ。**千太**はその噂の真相については一言もしゃべらず、心も口も閉ざしてしまいます。それから、**千太**への限り無いいじめが始まります。**蝶子**は、この時の様子をこう語ります。「それからというもの、私たちの中のにじめ虫は、蜂のように刺し、蠅のように付きまとい、蟻のようにたかりました。」

映像は、生徒たちが恐ろしい虫たちに変態し、**千太**の心をぼろぼろにしてゆく様子を象徴化して促えます。

ある日の帰り路、**千太**は道端で弱った蟬に出会います。**千太**は、蟬の弱った身体を癒すために家に持ち帰り、本格的な夏を待ちます。数日後、**千太**は夏休みを迎え、蟬にこう呟きます。「夏だよ。ほんものの夏が来たよ」**千太**は、元気になった蟬を公園で放ち、フルートを奏でる女性**響子**に出会います。その音色は、**千太**のぼろぼろに傷付いた心を洗い、心の疲れを癒してゆきます。過去にいじめを受けた経験のある**響子**は、**千太**にこう語りかけます。「好きなことをうんとするといいよ。きつと、気持ちがぐたびれちゃってるからね。栄養をあげるの。でもね、無理しちゃだめよ。少しずつ、少しずつね」**千太**の心が少しずつ回復してゆきます。大好きなファール昆虫記を読むために図書館に通い、毎朝、公園の池の回りを走るようになります。図書館では、学区の違う**勉**という友だちができ、朝のジョギングでは関西から遊びに来ている**きたる**と友だちになります。やがて、**響子**を交えた四人は、蟬の合唱を聞く仲間になります。そこに偶然の出会いから**蝶子**が加わります。**蝶子**にとって**響子**は、フルートを教わる先生でした。この時の心境を**蝶子**はこう語っています。「その時、私の気持ちは複雑でした。何か後ろめたいような、逃げ出したいような……」すべてのわだかまりを掻き消すかのように、命の力にあふれて蟬の声が響きます。五人は、蟬の世界を語りあいながら、命の尊さを実感します。**千太**は語ります。「たくさんの蟬が鳴いているように思えるけど、ああ

やって大人になれる蟬は本当に少なんだ」そして、**蝶子**もこう続けます。「脱皮できずに、鳴くことをしらずに死んでしまった幼虫たち。歌いたくても歌えない、鳴きたくても鳴けない蟬たちのことを考えると、今生きているということ、命というものがとても大切に思えるようになっていました」。

登校日、**千太**の席にいじめグループがやって来ます。そして、自分たちが殺した無数の蟬の死骸を**千太**の机の上に広げます。止めに入つた**蝶子**も突き飛ばされてしまいます。**千太**はついに逆上し、天を仰ぎながら悲鳴に似た凄まじい叫び声をあげます。

「ぎやああああおまえたちに鳴けない蟬の悲しさがわかるかああ」その時の様子を**蝶子**はこう語ります。「その時、この地上にいるすべての蟬たちが、いつせいに鳴いたような気がしました……」**千太**の叫びは、まさに弱き生き物たち、声なき者たちの怒りの悲鳴でした。いじめグループは恐怖に恐れおののきます。やがてその恐怖も**千太**の激しい怒りも同じ深い悲しみが変わっていきます。どうして、こんなことになってしまったのか。どうしたらこんなことをおしまいにするのか。**蝶子**は心の底からおもいます。「このままではいけない。このままにしてはいけない。脱皮できない幼虫は死んでしまうのだ。みんなの心が死んでしまう。にんげんの心が死んでしまう」**蝶子**は担任の先生に相談し、夏休みの一日を使つてホームルームを開きます。おもいつきり話をするために。

このホームルームの時、**千太**はこんな作文を読みます。「誰の心の中にもいじめ虫がいる。ぼくの心にもいる。きみの心にもいる。いじめは、誰も得をしないよ。いじめる人もいじめられる人も、みんなぼろぼろになるからね。まるで害虫にやられた葉っぱみたいだよ」……………

夏休みも終わりに近づき、**きたる**が関西に帰る日が来ました。**千太**、**蝶子**、**勉**、**響子**は、駅のホームで**きたる**と別れを惜しみながら、来年の再会を約束します。過ぎ去ってゆく新幹線に向かって、四人は大きく手を振ります。**蝶子**は最後に語ります。「こうして、私たちの夏は終わりました。私は、大きく手を振りながら、自分のいじめ虫に、もう一度さようならを言いました。

さようなら、さようなら、いじめ虫……………」END.

●お問い合わせ・お申し込みは

・お問合せ・お申込みは

(映)

有限
会社

博映商事

TEL 092-741-0306 FAX 092-741-6628

〒810-0073 福岡市中央区舞鶴1-3-31-220

【HP】 <http://hakuei-shoji.jp>

【E-Mail】 info@hakuei-shoji.jp